

論文の内容の要旨

論文題目 西ドイツにおける 68 年運動の余波 ―若者のローカルな運動の実践に注目して―

氏 名 川崎 聡史

本稿では、1960 年代の大規模な抗議運動である 68 年運動に影響を受けた西ドイツの若者が、60 年代末から 70 年代にかけてローカルな活動をどのように展開したのかを考察した。具体的には次の問いを検討した。社会主義を信奉する若い活動家はいかなる目標を掲げ、それをローカルな領域ではどのように実践したのだろうか。外部の組織・制度と若者の運動の間には、どのような関係が存在したのだろうか。若者の運動において、社会主義思想が果たした役割とは何だったのだろうか。さらに戦後の西ドイツ社会は全体としてリベラル化、つまり社会の自由化と多元化を経験したが、それと運動の関係はいかなるものだったのだろうか。これらの問いに答えるにあたり、本稿は 60 年代後半に設立された自治的な保育所であるキンダーラーデンと、ドイツ社会民主党（SPD）の青年組織であるユーズーに注目した。

建国当初の西ドイツでは保守的な風潮が支配的だったものの、50 年代からの経済成長と生活水準の向上によって市民の意識に次第に変化が生じた。市民は、民主的な意識を持って自発的に政治に関わり始めるとともに、自らの行動によって社会をより良くできると信じるようになった。こうした市民の政治意識の高まりは、68 年運動の前提になった。この抗議運動では、社会全体に関わる様々な問題が争点になり、学生活動家が重要な役割を担った。特に社会主義ドイツ学生同盟（SDS）が、学生運動の指導的な組織になった。SDS に参加したルディ・ドゥチュケのような反権威主義者はセンセーショナルな抗議アクションを行い、学生運動の魅力を高めた。しかし、抗議運動の急進化によって、SDS は次第に 68 年運動の中で孤立した。SDS の孤立化と学生運動の影響力の低下は、キンダーラーデンとユーズーの党内反乱のような新しい運動が登場する前提

になった。

キンダーラーデンは、1967～68年にSDSの女性メンバーによって設立された。特に西ベルリンのフェミニストは、社会にも学生運動内にも存在している男性中心主義と観念的なイデオロギー論争を批判し、私生活に近い領域で活動することを求めて、新しいタイプの育児運動を開始した。しかし、フェミニストの運動は、すぐさま男性社会主義者からの挑戦を受けた。男性活動家は、社会主義キンダーラーデン中央評議会を設立し、フェミニストの運動を吸収しようとした。フェミニストは、必ずしもキンダーラーデンのみに注力したわけではなかったため、西ベルリンでは男性活動家が中心になって活動するようになった。

キンダーラーデンは、西ドイツにおける保育施設の不足状態を解決するために設立された。さらにキンダーラーデンは、規律と服従を重視する伝統的な教育に対して批判を加え、それへの代替案を実践する施設だった。活動家は、反権威主義教育を提唱し、次のような目標を持って子どもを育てようとした。子どもを規律訓練から解放すること。子どもに自らの生活を自ら決める能力を身につけさせ、自律した人格に育てること。加えて社会主義的な活動家は、反権威主義教育をさらに発展させて子どもを確信的な社会主義者に育てることを目指した。活動家は、「プロレタリア的教育」を提唱し、1920～30年代の社会主義者による教育理論を実践しようとした。

本稿は、社会主義者によって運営された2つの施設に注目し、そのローカルな実践を明らかにした。西ベルリンの第2シェーネベルク・キンダーラーデンは、反権威主義教育と「プロレタリア的教育」をできる限り忠実に実践しようとしたため、参加している親と対立することがあった。西ベルリンのヴェアフト通りのキンダーラーデンは保育を重視した。このキンダーラーデンの活動家は、早い時期に社会主義思想を前面に押し出すことをやめ、代わりに地域住民の要求を汲み取ろうとした。活動家は、子どもを交通事故から守ることを目指し、プレーパークと呼ばれる新しいタイプの遊び場を建設することで、子どもの生活の質を高めようとした。そのためこのキンダーラーデンは、地域住民と良好な関係を構築できた。

キンダーラーデンは、当初は社会に対する抵抗組織であろうとしたものの、当初の急進性は次第に薄れていった。多くのキンダーラーデンは、行政とメディアとの関係、および日々の運営を通じて通常の保育施設に近づいた。

ユーゾーは、60年代後半には学生運動から影響を受けて左傾化し、1969年から党内反乱を開始した。ミュンヘン連邦会議で青年党員は、長期的に既存体制を克服し、社会主義社会を樹立することで、社会の民主化を進めることを目指した。ただその要求の核心は、一般の党員と社会の草の根により多くの参加機会を与えることだった。

ユーゾーは、SPDを再び労働者階級政党に引き戻そうとした。青年党員は、SPDへの忠実さをアピールしつつ党の政策を強く批判したが、これは党幹部会からの抵抗と反発を引き起こした。また、運動の方針についてユーゾー内部で意見対立が存在し、党内の改革はあまり進まなかった。

その代わりにユーゾーは、その目標を党外のローカルな場で追求した。特にフランクフルト・アム・マインでユーゾーは、都市再開発問題に取り組んだ。青年党員は、市民イニシアティブと協力し、SPD市政府の再開発政策に反対した。ユーゾーは、合議機関を組織して賃借人の意志表

明の機会を作り出したり、公益的住宅企業に住居の管理を委託して社会的弱者に優先的に貸し出させた。青年党員は、地方では比較的円滑な活動を行うことができたものの、特に共産主義組織との関係に関しては SPD と対立した。SPD 幹部会は共産主義組織との関係を断ち切ろうとしたが、このことはユーザーがローカルな領域で活動する場合の障害になった。党幹部会は、共産主義者と共に活動した青年党員に党からの追放も含む厳しい制裁を加えた。しかし、ユーザーによる地方に山積する問題を解決しようとする姿勢自体は、党から直接の批判を受けることはほとんどなかった。

1973～74 年以降、ユーザーの活動は停滞するようになった。その理由は 3 つあった。まず、ユーザー内部で社会主義理論をめぐる教理論争が激化したためである。第二に、「過激派条令」によって、党幹部会が若い党員を統合する方針を転換させたことが挙げられる。第三に、党幹部会が規律措置を強化させ、ユーザーの行動に直接介入するようになったためである。これらの要因で、1977 年までにユーザーの党内反乱は終息した。

本稿は、キンダーラーデンとユーザーの活動に関する分析を通じて、68 年運動がその後の若者の運動に与えた影響について検討した。68 年運動は、3 つの遺産を残したといえよう。第一に、多くの若者が継続的に政治活動に参加するようになったことである。第二に、若者の運動が公共空間で存在感と影響力を増したことである。第三に、若者は長期的に自らの運動が成功するだろうという楽観主義を持つようになったことである。

これら 3 つの遺産を前提にして、その後の若者は運動を展開した。本稿は、こうした条件をもとに生まれた若者の政治的態度を「ポスト革命的理想主義」と名付けた。これは、社会主義社会の実現を理想として掲げ、社会の急進的な革命的変革を目標にしているものの、近い将来の暴力的革命によってではなく、既存の社会制度内での長期的な取り組みによって目標を達成しようと試みる政治的態度として定義した。この態度をとった人々は、政治的な活動の対象を「コミュニケーション化」した。本稿は、この「コミュニケーション化」を、政治的問題を生活共同体や地方自治のレベルに落とし込んで解決しようとする試みと定義した。「ポスト革命的理想主義」と「コミュニケーション化」は、キンダーラーデンとユーザーの展開を説明するものである。

「コミュニケーション化」は、60～70 年代の社会における領域をめぐる争いの一部だった。キンダーラーデンとユーザーは、自分が直接関わる事柄について自ら決定できる領域を求めていた。しかし、その運動は当時の連邦政府の政策と矛盾していた。首相ヴィリ・ブランドは社会の民主化を呼び掛けたものの、その改革政策は民主的でない性質を持っていた。改革政策の内容は、専門知識を持つエリートによって決定され、各分野の指導者の合意を通して実行された。これは、国家権力による介入領域の拡張を伴ったため、市民による草の根民主主義と対立した。

キンダーラーデンとユーザーは、このような国家権力の拡大にローカルな領域で活動することで対抗した。彼らは、市民の新しいタイプの要求を取り上げて、市民の私生活に近い領域で活発に運動を行った。若い活動家が運動に熱心に取り組んだ理由は、社会主義思想を信じていたことにあった。社会主義思想は、当時の西ドイツ社会の状況を適切に説明していないことがあったものの、若者の問題意識を具体的な行動につなげる特別な力を持っていた。この思想は、若者同士

を結びつけるメディアとしての役割を持ち、運動を組織するためのきっかけになった。活動家が信奉していた思想は、しばしばドグマ的で厳しい対決的な世界観を持っていたものの、その頑固さゆえに若者に熱心に活動させた。「ポスト革命的理想主義」の態度を持つ活動家は、長期的に安定して運動したことで、これまで意識されていなかった政治的問題の存在を公共空間で広く認識させた。これは、新しい主体と問題が重要な社会的要素として承認されるという意味で、社会の多元化を進展させた。このことは、社会のリベラル化と評価することができよう。